

柳田國男の「主体性」の学問 ー 比較民俗研究の新しい地平を開くために ー

フレデリック・ルシーニュ[※]

柳田の「主体」のとらえ方の主な特徴は、柳田が人間の「主観性」や「内面性」を重んじたことにあったといえる。この点について桑原武夫は興味深い発言を残している〔桑原武夫 1983〕。

これは（柳田が科学者であったかどうかという問題：筆者引用）ルソーの、自分の学問は自分を救うためにやっているのであって、合理主義啓蒙派のデイドロやヴォルテールのように、他人に教えるためのものではない、というところともつながってくる。つまり学問は内省を伴った、どこかに主観的なものを持ち、どこかに文学に近いものをもつものであるのに対して、科学は客観性を理想とし、そのモデルは数学・物理学であり、学問のほうは、モデルとしては生物学をとるのではないか。そういう対立を考えていきますと、いろいろな問題あるのです。

この桑原武夫の発言は柳田の学問の性質を正確に把握している。柳田の文章の曖昧さは彼の文学的才能に由来するだけではなく、そこにもっと根本的な問題が横たわっているという事実を鋭く指摘している。学問とは何か、人文科学とは何か、主観性と客観性はどのような基準で見分けるべき

かという、柳田民俗学が提起する根本的な問題にぶつかって途方に暮れる恐れもあるだろうが、「主観性」と「自省」の関係だけに焦点をすれば、柳田の学問のなかに豊富な方法論の可能性を見出せると思う。

柳田は文章の書き方としても、読者に「なるほど、自分の小さいころに経験した習俗の意味はこれだったのか」というような内面的な感情を抱かせる文章体を駆使した。近代社会に生きた当時の日本人の読者にとって、世界観を引っ繰りかえすような読書経験をさせられた、と記憶する読者は何人かいる。この書き方は読者の主観性に訴えながら、読者に主体的に自分のアイデンティティの中核へ迫って民俗調査をしてもらえるように働きかけた。柳田の執筆の目標はまさにそこにあったといえる。

柳田の業績を読めば読むほど、大正初めの『郷土研究会』の編集方針から、「一国民俗学」確立時代をへて、戦後の『先祖の話』の晩年まで、柳田が一貫して自分の学問を「自己省察の学」や「内省の学」と規定した理由を考えさせられる。「教育民俗学」の可能性をさぐった関口敏美にならって柳田の民俗学を「自己形成の学」とみなせば、柳田の学問のコンテクストのなかで自己形成の担い手である主体の意味と位置をもっと研究する必要があると私は最近思うようになった。

※神奈川大学歴史民俗資料学研究科博士後期課程

管見したところ、今までの柳田国男研究のなかに柳田の思想や学問における「主体」や「主体性」の問題をもっぱら検討した論考がないように思われる。ただ、すでに柳田民俗学における主体性の問題の重要性に気づいた論者は少なくない。たとえば先ほど挙げた関口敏美は、柳田は「『郷土研究』によって『地方を本位とする学問』を興し、地方住民の主体としての自覚を喚起して、『郷土研究』の過程が同時にまた主体形成の過程でもあるような『学問』を構想した、という見解で柳田民俗学における主体の課題を注目した研究者のひとりである〔関口敏美 1995年〕。

柳田の思想と学問における主体や主体性に対する特殊な眼差しの理由に関しては、永池健二の次の文章のなかで示唆的に説明されている〔永池健二 2009年〕。

異国、異民族の探求としての旧来のエスノロジーが、対象の外に身を置くことによって外からの、あるいは上からの、とでもいうべき特権的、超越的な視座を前提としていたのに対して、郷土研究は、その視座を内へと転換することによって、主体の位置と視座とを開かれた普遍的なものへと組み換えようと試みるものであった。

ここで、柳田国男の郷土研究とその展開としての「一国民俗学」における主体への普遍的なとらえ方の転回が取り上げられている。つまり、西欧化の「反措置」〔伊藤幹治 1975〕として確立された柳田民俗学は「内への転換」を強調する形で、主体への普遍的な視座の可能性を開こうとしたという重要な分析である。

また、鳥越皓之は『柳田民俗学のフィロソフィー』のなかで、科学認識論の用語を借用して、柳田国男が「観察主体」と「認識主体」の関係をたくみに再構築していたという貴重な問題提起を提供した。

他方、周知の如く、柳田国男が作り上げた日本民俗学の学問の出発点には日本人の主体性の確立の希望があったのみならず、柳田が将来の目標として掲げた「世界民俗学」の課題の中にも、諸民族の主体性への柳田の関心と期待があった。したがって、ここ10年ぐらい、この柳田民俗学における普遍的な視座の存在を論じた文化人類学者も現れている。特に桑山敏己は、主体あるいは主体性というタームをキーコンセプトにしないとしても、ネイティヴの人類学（anthropology at home）と同じく含有している柳田民俗学のエミックス（内的）な方法の可能性を評価している〔桑山敏己 2008〕。文化人類学者の間に、エミックスな視座が陥りやすい閉鎖性の問題を十分意識しながらも、柳田民俗学の先駆的なエミックスな方法を批判的に検討している姿勢が広く見受けられるのである。

私は特に注意したい争点は、柳田の理論と文化人類学の理論の相違点や接点というよりも、方法論としての、主体への普遍的な視座を含んだ柳田民俗学の「経世済民」の問題である。「経世済民」の指向をもつ柳田民俗学に対する理解や評価は、論者によって大きく分かれている。ナショナルのレベルと個別のレベルの両極の間に進められた「柳田の試みは本来、分裂を孕んだものであった」という天艸一典の指摘は的確だと思う〔天艸一典 2000年〕。つまり、なに

よりも柳田の研究プログラムは方法的に無理をして行われたと言わざるをえない。そして（反対の意見があるかもしれないが、客観的にみたら）思想的にも柳田が「経世済民」の指向（国民主義の指向）とナショナリズム（国家主義に迎合する指向）とを両方合わせて持っており、その二つの指向が柳田民俗学のなかに表裏一体の状態にあった。さらに、上述した桑原武夫の発言でふれたように、柳田民俗学の独自の研究スタイルは、ある意味で科学的な理論を拒む傾向があり、柳田の天才的な文学の才能に頼りすぎるきらいがあったということを現在の人文科学のスタンダードの視点で言えば、やはり許し難い問題点である。したがって、方法的にも思想的にも表現的にもマイナスな側面を余りにも抱えていた柳田民俗学に対して「柳田さらば」と言いたくなる研究者が登場しても不思議ではなからう。

しかし、柳田の学問のすべてを捨てていくべきはずではないし、その方法において柳田が何をやろうとしたのか、読者や国民の一人ひとりにどのような希望を託していたのか、という問題を冷静に考える必要があるであろう。そうすれば、柳田民俗学の「経世済民」の目標がもっと鮮やかに見えてくるはずである。ここに、正面から柳田民俗学における「主体」の問題を検討する意義があると思う。

「主体」というキーワードを軸にした分析方法で検討すれば、今までの先行研究で捉えきれなかった柳田の学問の特徴をより適切に分析できるし、1960年代・1970年代の豊かな柳田研究史の理論（鶴見和子など）を掘り起こすことで、それらの理論の整理

や再評価もできるのではないかと期待している。

主観性を基盤にして自省の学問を築いていた柳田の学問における「主体」のとらえ方はどの程度で21世紀の民俗学のために有益な理論になれるか、という課題を設定したい。言い換えると、21世紀のグローバルな世界のなかで20世紀前半の柳田民俗学の方法が今でも有効かどうかという問いに対して、柳田の主体・主体性への眼差しを十分に検討すれば、この柳田民俗学の視点が今なお有益な現在性をもっていると論じていきたい。

大がかりな研究課題ではあるが、柳田の主体的なアプローチから何を学ぶべきか、21世紀のナショナルやインターナショナルの民俗研究のためにまさに普遍的な「自省の学」の確立の時期が迫ってきているように思われる。現在どちらかというと、柳田国男の民俗学を自己省察の学として把握し、主体性を強調するような論者は日本民俗学会と距離をおいた外部の人が多いようである。その一人として、柳田国男研究会の主要メンバーでもある永池健二は「いま、当代の民俗学は、私たち自身が生きる現代日本の自省の学たりえているのか。問われているのは、私たち自身なのである」の如く学会の現状を厳しく評している。このように様々な研究者によって論じられてきた柳田民俗学に対して、フィールドワーカーの民俗学者が調査や実践的研究を通してその方法論を再発見する時期が今きているのではないかという気がする。

そして、ここで比較民俗学の役割がとても大きいと思われる。なぜならば、桑山が指

摘したとおり柳田の「世界民俗学」と「比較民俗学」は全く同義語ではないにせよ、両者とも世界的規模をもつ比較方法を含んでいる。もし「常民の学問」としての「世界民俗学」を確立したいならば、主体性を「世界」的・普遍的な必要基準として設定するのが当然であり、また主体性への視座を保証し発展する方法論を確立するのが必要になってくるだけでなく、そのためには、各国の「主体性の学問」としての「常民の学問」を比較する「比較民俗学」のアプローチをも試みる、方法論としての「比較民俗学」の新しい地平を開く必要性もいつれか現れてくるだろう。

参考研究

天舛一典 「西欧文化」、野村純一[ほか]編『柳田國男事典』勉誠出版、2000年

伊藤幹治編 『現在のエスプリ』no.57「柳田国男」、至文堂、1975

桑原武夫 「柳田さんと私」、谷川健一編『地名と日本人：シンポジウム柳田学の継承と展開』講談社、1983年

桑山敏己 『ネイティヴの人類学と民俗学：知の世界システムと日本』弘文堂、2008

関口敏美 『柳田國男における「学問」の展開と教育観の形成』風間書房、1995年

鶴見和子 『内発的発展論によるパラダイム転換』藤原書店、1999年

鳥越皓之 『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会、2002年

永池健二 「〈日本〉という命題—柳田国男・「一国民俗学」の射程」『柳田国男・主題としての「日本」』柳田国男研究会6、泉社、2009年

新刊紹介

中国民間故事調査会編 『中国 民話の旅』

本書は、中国貴州省黎平県内のトン族4集落で行われた3年間にわたる昔話の日中合同調査の報告書といえる。トン族は、鼓楼・風雨橋など杉材を巧みに使った民俗建築で知られるように民俗的生活を豊かに育んできた。トン族の民間故事「nyon c」の特徴は、悪を制し善を称賛、勤勉を讃え、怠け者を戒め、知恵あるものを称える語りにあるとトン族の民間故事研究家、鄧敏文氏の概説で本書は始まる。次いで、日本側調査団世話役の国学院大学教授、花部英雄教授が、調査の概要、伝承の状況を解説した後、Ⅰ 異界・精霊との出会い（章題解説・繁原央）Ⅱ 人間世界の由来・悲喜劇（章題解説・立石展大）Ⅲ 動物世界との交流（章

題解説・花部英雄）の構成でトン族の昔話55話が再現される。コラムや写真がその背景を補ってくれる。巻末には、呉定国「トン族民間故事の特色」の寄稿、話型対照表、和訳されたおもな昔話集の紹介、が付され中国昔話の入門書的性格も果たしている。

昔話研究は話型を中心に早くから国際比較の志向を持った研究分野であった。今日では、村レベルでの採話と分析までに至り、比較の前提が築かれ今後の研究が期待される。この方面では、CDなどで音声資料も是非、その一部でも参考につけてほしいと思われた。

（佐野賢治）

三弥井書店 四六判 237頁 2011年2月刊